



ペテロ行

2017年12月1日発行
(毎月1回1日発行)

カトリック谷山教会

891-0113
鹿児島市東谷山2-33-13
TEL 099-268-2084
FAX 099-284-5738

E-Mail: taniyama-cc@lagoon.ocn.ne.jp URL: <http://www5.ocn.ne.jp/~tycc/>

発行人： 頭島 光 神父 編集委員： 太田勇二郎 Sr.下川千穂子 岸誠之助

貧しく生きる

◆いよいよ、今年も終わりが近づいてきました。12月に入るとすぐ待降節です。イエス様は、神の子でありながら、私たちと同じ者となってくださり、この世界に生きて下さいました。このことは、私たちにとって、何かの意味が問われているのではないのでしょうか。まず、自分たちの生活の質を見直してみましょう。既に、私たちは質素な暮らしに幸せを感じることを、忘れてしまったのではないのでしょうか。いま、まさに日本経済は大量消費時代の終焉を迎えつつあります。そこで、今こそこの「共に暮らすこの家」を見つめ直しつつ、この待降節を迎えるにあたって、「貧しく生きる」ことを黙想してみたいと思います。

◆「お前の財産に応じて、豊かなら豊かになり施しをせよ。たゞ、少なくとも少ないなりに施すことを恐れてはならない」(「トビト記4章8節」参照)。勿論、これは聖書の言葉ですが、あなたが豊かであるかどうかは、施しをする際には全く問題ならないことを教える言葉です。「私は、いま持ち合わせが少ないので、あなたのために何かしてくれと言われても何もできません。」、また「私は今、そこそこ豊かですが、いっとうなるかわかりません。」と言うでしょう。これは、いずれも物を大切にしない人の言い分のようにも聞こえます。問題は、一体何が私たちの心を惑わしているのか、ということでしょう。実に、それは「節欲」です。「節欲」とは欲望を抑えることです。この心が私たちを惑わす原因となっているようです。

◆つまり、こういうことです。トビトは息子トビアを長くつらい旅に出すその前に、教え諭しておかねばならないと思い、この言葉を送っています。人間とは、辛く手痛くて、悲しい現実と直面する時、欲も絡んで、他者のことを愛し難くなるものなのです。父トビトは息子がそんな心に陥らないようにと、「余分なものはすべて施し、施しをするときは喜んでするように」と、何度も何度も、繰り返し繰り返し、教え諭しています。「より少ないことはより豊かなこと」とは、まさに聖書の教えから出た、一つの真実です。自分が何も持っていないことに悲しみ、挫けて生きるのではなく、小さく些細な事物にも、喜んで心を留める豊かさこそ、欲から自由になる秘訣です(「ラウダート・シ」No. 222 参照)。

◆自分の中にある欲望を抑え「貧しく生きる」ことを知るための答えは一つです。クリスマスのイエス様の馬小屋を想像し、幼子が寝ているその飼葉桶の中をそっと覗いてみてください。そこに、必ず答えが見つかります。言い換えれば、あなたの生活の一瞬一瞬の現実を切り取って、深く味わってみることで、よりよく生きるの意味が、そこに隠されていることに気付くでしょう。あれも、これもと手を出し、手元に置いてみて、あなたは真に喜べますか。それより、幼子イエス様の寝姿に見つけてください。そこに感謝と愛が見えたらあなたは救いを見たのです。あらゆる物への執着や生活への不安も微塵もなくなります。貧しさの中のあなたの豊かさに開かれる、クリスマスはすぐ傍に来ています。

主任司祭 頭島光神父



今月の聖人から

アデライデ未亡人

12月16日



十世紀の初めに、フランスのブルゴーニュの王女であったアデライデは、生涯種々の苦しみを受けて忍んでいたが、常に神に対する深い信頼と他人に対する慈愛を保ち続けた。

最初に結婚した夫は毒殺され、その上、毒殺者の息子との結婚を強いられた。彼女がそれを拒絶した時、彼女は城中の牢に閉じ込められてしまった。

しかし、後にドイツのオットー大帝が彼女を開放して自分の王妃とした。大帝の死後、長子が後をついでオットー二世となったが、彼の妻はアデライデを追放してしまう。暫くしてオットー二世は、彼女に詫びを入れて連れ戻したが、彼の死後、再び追い出されて老年まで帰ることはなかった。

999年12月16日、アデライデは自分が創立したアルサスの修道院で神の許に召された。

Taniyama CC NEWS

12月2日

信徒会館ホールの改修工事
(聖堂内等の暖冷房設備を含めて)

が終了し、いよいよ新しい備品の導入がありました。机30台、椅子90脚が運び込まれ、その机の組み立てが有志の皆さんによって行われました。新しくなった信徒会館(ホール)の愛称は現在募集中ですが、先の司牧評議会では「クレメンス・ホール¹」という名称が提案されています。



¹ イタリア内のみで活動していた修道会をアルプスの北側に導いた聖人。彼がいなければレデンプトル会が現在のように全世界に広がることはなかったでしょう。別名「榎の木の人」。



ムイベルガ神父のアンテナ

1944年のクリスマス

その時わたしの家族は、第2次世界大戦半ばのひどい生活を強いられていました。その上にこの年は、猛烈な寒さにも見舞われていました。しかし、この年の待降節は、私の子供時代で一番楽しい冬でもあったのです。

母は、刈り取られた後に落ちている麦の落ち穂を拾っていました。こうして母はクリスマスのためにわずかなクッキーを作りました。もちろん母はこの貴重な品物を地下室に注意深く隠していました。私たちは爆撃の時だけこの地下室に行くことができたのですが… そう、あの恐ろしい爆撃！ おお、わたしたちはその時どんなに怖かったことか！ そうであっても爆撃になることを時々は待っていました。なぜなら地下室に行って少しクッキーを食べる楽しみがあったからです。時々、半日も地下室に留まることがありました。その時、退屈しないように、長女の姉は私にクリスマスの歌を教えました。それ以外にもうひとつの楽しいことがありました。それは待降節のカレンダーの窓を開くこと。この暦は兄貴によって作られたものでした。

しかし、一番大きな喜びはクリスマスツリーを飾ることでした。教会の神父はきれいに飾ったツリーの写真を見せたので、私たちも同じようなツリーを作りたくなりました。飾りになった物はリンゴ、麦わらから作られた星、クルミ、そして粘土から造った天使でした。好奇心の強いわたしの姉はなんでも知りたがって、神父に質問しました。どうしてわらの星とリンゴはクリスマスツリーにふさわしい飾りなのですか。神父の説明は後年にもよく聞きましたので、ここで皆さんにも伝えたいと思います。

まず司祭は、クリスマスツリーから楽園の樹を思い出すように指導しました。アダムとイヴはこの木の実を食べない筈でした。しかし、かれらはどうしたのですか？ 彼らが神様の命令を軽視せず、神に従っていれば、彼らは楽園で幸せに暮らすことができたでしょう。しかし今は、アダムとイヴにとって、すべての仕事が厳しいものになりました。わたしたちはクリスマスツリーを見るとすぐプレゼントを思い浮かべます。それは間違いではありませんが、わたしたちは楽園の木も思い出しているのでしょうか。イエズスはこの楽園の木に新しい形を与えました。この新しい形は十字架です。十字架上でイエズスは父である神の望みをかなえました。つまり、人間と神を和解させて人間の罪を贖って取り消すことです。十字架の木にはリンゴがかけられていません、救いの木にはイエズスさまだけがかけられます。

最後に星の飾りについて簡単なことばをつけ加えたいです。福音書を読むと、ひとつの星が神をさがしている3人の博士たちをベトレヘムに案内したとあります。彼らは神からもらったしるしを理解しました。神様は私たちにもイエズスさまを見つけるためにいろ

いろなしるしを与えてくれます。小さい時にわたしの教会の子供たちは、クリスマスのイヴの時に年寄りの方々を、特別な場所に案内しました。あの時におじいさん、おばあさんたちの目は嬉しさと輝いていました。ベトレヘムの星が、私たちの小教区にも、私たちの顔にも輝いているように祈っています。

(御絵は、神父様が卒業されたイエズス会の高校に架けられている「主の降誕」の図です)

